

氏名(本籍)	鄭 聖 美 (韓 国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第5234号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	韓国人日本語学習者における日本語の書記漢語の音韻推測 -日韓両言語の音韻が共に未知である場合-
主査	筑波大学教授 Ph.D.(日本語学) カイザー シュテファン
副査	筑波大学教授 Ph.D.(言語学) 岡崎 敏雄
副査	筑波大学教授 加納 千恵子
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 砂川 有里子
副査	筑波大学准教授 博士(人文科学) 一二三 朋子
副査	筑波大学講師 博士(比較社会文化) 許 明子

論文の内容の要旨

韓国の脱漢字化によって、今日の韓国人日本語学習者（以下、韓国人学習者）は漢字系でも非漢字系でもない曖昧な状況に置かれている。よって、今日の韓国人学習者に対する日本語教育では彼らの漢字・漢語習得のメカニズムやストラテジーにもとづいた教授法が求められてきたが、まだ彼らの漢字・漢語習得のメカニズムやストラテジーを調べた実証研究は萌芽の段階にある。特に、日本語の漢語の「音韻」習得においては全く実証されていないのが現状である。なかには、「韓国人学習者には韓国語の漢字音と日本語の漢字音を関連づけて覚える傾向がある」（石井 2002）という主張や、「韓国人学習者には韓国語の読みの同音性に沿った結び付きが形成されている」（和田・伊藤 2004）という主張も見られる。しかし、いずれも学習者の用いる実際のストラテジーを観察したものではなく、アンケート調査や自由連想などの結果を研究者が解釈したものであり、音として覚えている韓国語の漢語が日本語の漢語に結び付く様子は明らかにされていない。このような状況のなかで、韓国漢字音と日本漢字音にはかなり規則的な音韻の対応が存在し、その対応規則が分かれば、一方の漢字音からもう一方の漢字音がある程度まで類推できるという信念にもとづき、音韻論的観点から日韓漢字音を対照し、日韓漢字音の対応規則を「音素レベル」で細かく調べた研究が数多く出された。ところが、それらの規則は学習者が熟知するにはあまりにも細かく例外も多いため、実際に学習者が日韓漢字音の対応規則をどのように探るかを調べる必要がある。そこで、本論文では、韓国人学習者の日本語の漢語の「音韻」習得における母語の影響を明らかにすることを目指し、韓国人学習者が未知の日本語の漢語に遭遇した際に日本語の「音韻」を推測する様子を観察し、韓国語音韻と日本語音韻を結び付けるストラテジーを調べ、そのメカニズムを究明することを試みている。具体的には、今日の韓国人学習者の「母語に漢語は多いが漢字能力は低い」という特徴に焦点を当てるために、「日韓両音韻が共に未知である漢語のみ」を対象に絞り、漢語が漢字で書かれると母語でも日本語でも読めないという場合には日本語の音韻がどのように推測され、音として覚えている母語の漢語がどのように利用されるかを観察している。

上記の課題を遂行するために、まず第1章では、本論文の背景と目的を述べ、先行研究を概観し、本論文

の位置づけを行っている。また第2章では、韓国人学習者を巡る漢字環境として、韓国語及び韓国における漢字事情について述べ、今日の韓国人の漢字能力と漢字意識に関する実態調査を概観している。さらに第3章では、今日の韓国人学習者の漢字学習に対する特徴を正確に把握するために、東京都内の日本語学校9ヶ所に在学している韓国人学習者371名に「漢字学習についての経験と意識」および「母語での漢字能力」を調べている。

その結果、アンケートからは、今日の韓国人学習者のほとんどは学校で漢字教育を受けた経験があるため、日本語の漢字学習のスタート時点から非漢字系学習者に比べて有利ではあるが、週一回一時間の選択科目としての授業以外には漢字から離れ、漢字学習を後回しにしているため、授業で習った漢字はなかなか定着できず、従来の漢字系学習者のような漢字能力は期待できないことが分かった。このような今日の韓国人学習者には、日本語学習が漢字学習の重要な動機となり、日本語学習によって漢字への興味や漢字能力の自己評価が上がることも分かった。しかし、漢字への自信は日本語学習後にも「自信がある」といえるほどには上らないことが分かった。つまり、日本語学習以前から母語の漢字に自信がないと、日本語学習を始めても自信がつくのに時間がかかるわけである。また、母語での漢字テストの結果もアンケート調査の結果と相通ずる結果となった。第3章の調査結果によると、今日の韓国人学習者の母語による漢字能力は一般的に、日本語初級レベルで8級か7級、日本語中級レベルで6級か5級、日本語上級レベルで5級か4級である。つまり、日本語学習開始の時点で読める漢字の数が母語でさえ非常に少なく、日本語レベルが上がるにつれ、母語の漢字能力も向上する傾向が見られた。よって、今日の韓国人学習者は母国の学校で1800字の漢字を一通り習ったとしても、その過半数は日本語学習開始時に漢字知識がほとんどないとも言えるほど母語での漢字能力が低いことが確認され、「母語に漢字が多いのに漢字能力は低い」という今日の韓国人学習者の特徴が明らかになった。

本研究の中心をなす第4章では、韓国人学習者の「母語に漢語が多いのに漢字能力は低い」という特徴に焦点を当てるために「日韓両音韻が共に未知である漢語」を対象を絞り、漢語が漢字で書かれると母語でも日本語でも読めないという場合に日本語の音韻はどのように推測され、その際、音として覚えている母語の漢語はどのような役割を果たしているかを観察している。調査方法としては、従来のように予め用意したアンケートを行う量的調査をやめ、調査対象者から報告された個々の実際の報告例を細かく眺め、探索的・解釈的に分析する質的調査を用い、学習者の実際に用いるストラテジーをボトムアップ式でカテゴリー化している。調査に当たっては、ミクロなレベルのデータが求められるため、6名という少人数を対象に日本語文章の音読における「発話思考」と「フォローアップ・インタビュー」を行っている。分析においては、まず、未知語の音韻推測についての報告が最も多かったLのデータをもとに、個々の未知語の推測において1つ1つの音韻推測が「何を手掛かりとし、何を推測するものか」を分析し、音韻推測ストラテジーをカテゴリー化している。その後、6名全員のデータに範囲を広げ、Lのケースに見られた推測の傾向が6名全員にも見られるかを確認しながら、推測の傾向とプロセスについて考察した。結果としては、まず、Lのデータから表1のような14種類の音韻推測ストラテジーがカテゴリー化された。

【表 1】音韻推測ストラテジー

推測過程	推測情報	ストラテジー
日本語音韻の推測	日本語情報	①音として既知の日本語の漢語からの検索
		②日本語による先後字頼りの検索
		③日本語の心内辞書の確認
	韓国語情報	⑨韓国語の漢語頼りのルール化
		⑩韓国語の漢字音頼りのルール化
		⑩韓国語音化
韓国語音韻の推測	字形情報	⑩部品分析
	韓国語情報	⑥音として既知の韓国語の漢語からの検索
		⑦韓国語による先後字頼りの検索
		⑧韓国語の心内辞書の確認
	文脈情報	⑩文脈頼りの検索
		⑨文脈の確認
	日本語情報	④日本語の漢語頼りのルール化
		⑤日本語の漢字音頼りのルール化

この 14 種類の音韻推測ストラテジーのうち、「韓国語音韻と日本語音韻を結び付けるストラテジー（⑨、⑩、⑪と④、⑤）」に注目し、韓国語音韻から日本語音韻を推測するストラテジーと日本語音韻から韓国語音韻を推測するストラテジーのうち、どちらが多いかを 6 名全員のデータから分析している。その結果、本調査の対象者は未知の日本語の書記漢語の日本語音韻を推測する際に、韓国語音韻の未知の場合においても、まずは未知語の韓国語音韻を推測した後、韓国語音韻から日本語音韻を推測するストラテジー（⑨、⑩、⑪）を用い、その韓国語音韻から日本語音韻を推測する過程を経ることが圧倒的に多かった。そこで、韓国語音韻から日本語音韻を推測するストラテジーに注目し、その特徴を分析した結果、韓国語音韻と日本語音韻の対応を探る際に、単語ごとに丸覚えした「韓国語の漢語の音韻＝日本語の漢語の音韻」の知識をもとに「韓国語の漢字音＝日本語の漢字音」という「音節レベル」の対応を探る傾向が見られた。よって、本論文では、日韓漢字音の対応ストラテジー（⑩、⑪）、わけても、比較的的成功率も高く造語力の向上も期待できる有効なストラテジーとして「⑩韓国語の漢字音頼りのルール化」に焦点を当てている。また、本章の調査結果にもとづき、韓国語学習者は韓国語音韻と日本語音韻の対応を、先行研究がまとめたように個々の「音素レベル」で探るのではなく、漢字音の「音節レベル」で探る傾向があると主張している。

第 5 章では、第 4 章の結果のうち、日韓漢字音の対応ストラテジー、わけても、「韓国語の漢字音頼りのルール化」に焦点を当て、そのメカニズムの究明を試みている。研究方法は、韓国語学習者 30 名に 20 個の韓国語の漢字音をハンブルで与え、個々の韓国語の漢字音から思い浮かぶ日本語の漢字音を思い浮かべた順番に書いてもらうというものである。そして、それをもとに、韓国語学習者がある韓国語の漢字音に対応するいくつかの日本語の漢字音の中で 1 つの日本語の漢字音を選択する際には、日韓漢字音の心理的類似度（本章で直接定量化したもの）、漢字音の習得順序、漢字音に該当する漢字の数、漢字音から構成される漢語の親密度や語彙情報などのさまざまな要因のうち、何を主な基準とし、何を優先するのかを分析している。

その結果、本調査の協力者には、ある韓国語音と対応する日本語音を探る際に、3 級以下漢字のように日本語学習の早い段階で習った易しい漢字の中で、韓国語音との類似度が最も高い第 1 音（音読み）を根拠とする傾向が見られた。そのため、その韓国語音との類似度が最も高い 3 級以下漢字の第 1 音（音読み）が属する日本語音が最も多く選ばれる傾向があった。しかし、類似度の高い 3 級以下漢字の第 1 音（音読み）が 3 級以下で音読みまたは語頭構成語として学習されない場合は、調査対象者にとって「日韓漢字音の対応ストラテジーの強い根拠となる 3 級以下漢字がないような状況」となり、類似度の最も高い音読みを何となく

当てるケースが多くなり、「韓国語音化」が起りやすくなったことを明らかにしている。

第6章「結論」では、本論文を総括し、本論文の結果の日本語教育への応用を記述するとともに、本論文の意義と今後の課題を述べている。

審査の結果の要旨

本論文は韓国人日本語学習者を対象に、知らない日本語の漢字を見たときに、その発音（論文では「音韻」といっている）をどのように推測しているかを質的研究の形で調査したものである。論文の中心的な部分である第4章では、推測のメカニズムを究明するために、日韓両言語において未知であるという条件を設定し、研究協力者に上記の条件に合致する漢字を含んだ日本語のテキストを読ませ、未知の漢字を推測する過程を発話思考プロトコルとフォローアップ・インタビューという方法を用いて追求している。つまり、テキストを読みながら引っかけた漢字について何を考え、どのようにして読み（発音）にたどり着いたかを報告してもらい、データとしている。そうして得られたデータをカテゴリー化し、どのカテゴリー（ストラテジー）が多く使われたかを分析している。結果として、調査協力者は知らない日本語の書記漢語の日本語の発音を推測する際に、韓国語読みを知らなくても、まずはその未知語の韓国語の発音を推測した後、韓国語読みから日本語読みを推測するストラテジーを用いることが圧倒的に多いということを明らかにした。これは、たいへん興味深い発見だといえる。

また、第5章では第4章で明らかになった「韓国語の漢字読み頼り」のメカニズムの究明も試みている。韓国人学習者30名にまず韓国語の漢字音（ハングル表記）と対応する日本漢字音（複数、カタカナ表記）を提示し、心理的類似度を評定させた。さらに、20種類の韓国語の漢字音をハングルで与え、それぞれの韓国語の漢字音から思い浮かぶ日本語の漢字音を思い浮かべた順序で書かせ、韓国人学習者がある韓国語の漢字音に対応する複数の日本語の漢字音の中で1つの日本語の漢字音を選択する際に、日韓漢字音の心理的類似度、漢字音の習得順序、漢字音に該当する漢字の数、漢字音から構成される漢語の親密度や語彙情報などのさまざまな要因のうち、どこに基準を置いているかを分析している。その結果、日本語能力検定試験3級以下の漢字のように日本語学習の早い段階で習った漢字の中で、韓国語音との心理的類似度が最も高く評価された音を根拠とする傾向が見られた。しかし、その音は3級以下で、音読みまたは語頭構形成態素として学習されていない場合は、類似度のより低い音を当てるケースが多くなるということを実証した。

本論文の中心的な部分である日韓両言語で未知の漢字音の推測ストラテジーについてはたいへん緻密なデータ収集・分析を行っているだけでなく、新しい研究方法を使用したことで信頼性の高い結果を得ている。従来の質問紙を使ったストラテジー研究では、学習者が実際に使っているストラテジーを観察することはできなかったが、本論文はその欠点を改良した点でストラテジー研究に新たな方法論を提唱しており、学界でも注目されている。

第4章は上記のようにたいへん斬新でオリジナリティーが高く、結果も大いに注目されるのに対し、第5章の研究方法はややアドホックな感があり、枠組みに改良の余地があると思われる。しかし、これは本論文全体の価値を損ねるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。